

読書感想文の部

※作品内の表現については原文のまま掲載しています。

小学校低学年

最優秀賞

(本文の掲載はありません)

優秀賞

「マザーテレサ」をよんで

北中小学校 1年生 和田 梨央さん

ひょうしにみたことのないふくをきたおんなのこがきになり、よみました。

こまっているひとやどうぶつをみかけるとかならずたすけてあげるやさしいおんなのこのおはなしです。インドでまずしいひとたちをささえてきたしんぷさんのおはなしをきいてじぶんもおなじことをしたいとおもったのです。そうしてインドだけでなくせかいじゅうにびょういんやおやのいないこどものいえを作りました。そのひとがマザーテレサです。

こころにのこったことは、マザーテレサがもらったかずかずのしょうのしょうきをすべてびょういんやこどものいえのために使ったことです。わたしは、とてもおどろきました。こんなにひとのことをおもえるなんてなかなかできることではありません。

いままでわたしは、だれかをおもいやることができていたでしょうか。ともだちやかぞくのかおがおもいうかできました。ともだちには、もっとやさしくせつしょう。がっこうでこまっているこがいたらこえをかけよう。おとうさんのだいすきなコーヒーをつくってあげたいな。おかあさんのごはんをてつだってあげたいな。ひとをおもえることは、すてきだな。

マザーテレサみたいなひとがふえればせかいがへいわになるのに。わたしは、そんなせかいにすみたいな。マザーテレサは、わたしのそんけいするひとです。

優秀賞

(本文の掲載はありません)

最優秀賞

「障害」という言葉のない未来へ

第一小学校 6年生 魚谷 彩乃さん

私は、「わたしが障害者じゃなくなる日」という本を読みました。この本は、作者の海老原さん自身が脊髄性筋(せきずいせいきん)萎縮症(いしゆくしょう)という体の筋肉がおとろえていく病気をわずらっています。そんな海老原さんが今までの人生を元に「障害」ということを教えてくれる本です。

私は、この本を読んで「障害」についてや、今まで自分が思っていたこと、全てを考えさせられました。

突然ですがみなさんに問題です。外国人・お年寄り・目の悪い人・車いすの人・妊婦さんこの五人の中で障害者は誰でしょう。正解は、五人全員です。でも多くの人は、目の悪い人と車いすの人を選ぶと思います。私もその二人だと思いました。しかし、作者の海老原さんは、生活するときに困ったり、不便だったり、危険を感じたら障害者だといっています。私はこの考えにすごく納得しました。この考えを、一人一人が持っていれば、障害者への思い、態度が少しでも変わるんじゃないかと思っています。実際にこの考えを知ってからの私は、ネットで障害について調べるようになりました。

そして、私が一番心に残ったことは、社会が少しずつ変われば、みんなが少しずつ手伝え、障害は障害じゃなくなっていくということです。これを読んだ私は、前の問題とつながっていることに気づきました。それは、外国人やお年寄り、妊婦さんに対しては、外国語や道徳の授業でどう接するか習います。そして、その人のことを知ることになります。私はそれが手伝うに入ると思います。なので、多くの人が障害じゃないと思っているんだと思います。しかし、目の悪い人や車いすの人などはあまり授業などでは習わず、理解されていません。なので私は、もっと障害について教えてもらえる場があってもいいんじゃないかと思っています。その方が、障害者にとって生きやすい世の中になるんじゃないかと思っています。

私は、何十年後かの未来で「障害」という言葉がなくなっているといいなと思いました。みんながより生きやすい世の中になってほしいです。でもそんな未来にするには、一人一人の理解が必要です。社会だけが変わっても、みんなが変わらないとそんな未来はこないのです。その未来を実現させるためにも、一人一人にもっと「障害」について知ってもらいたいなと思います。

優秀賞

「みんなちがってみんないい」

第一小学校 6年生 宮脇 茅那さん

「弱虫な心」それは人間だれもが持っている心です。

この本にてでくる主人公ゲイブリエルは、五年生に進級したくないと思っていました。私も、来年は中学生になるけれど、まだ小学生のままでいたいなあと思う時があります。だから、ゲイブリエルの気持ちが少し分かります。中学校に行くと、生徒の人数がいきなり増えて、勉強環境も変わるし、新しく友達もつくらないといけない…。それから、部活が忙しくなり、家族とどこかに行く時間も減るだろうし…。何よりも「いじめや仲間外れをされたらどうしよう」と、不安だからです。ゲイブリエルも、不安なことがたくさんあったんだと思います。

そんな中で、親友のフリータはある作戦をたてました。それは、自分のこわいもののリストをつくって、そこに書いたも

のを一つずつ克服していき、こわいものをなくすという作戦です。こわいものを克服していく中で、ある日、フリータがいじめっ子のデュークのお父さんに、黒人をひどく差別する言葉、「ニガー」という呼び方をされるという出来事がありました。フリータは、すごくつらくて、悲しかったと思います。周りには、たくさんの大人たちがいたのに、みんな聞こえなかったふりをして、注意をしませんでした。私はその場面を読んで、腹が立ちました。なぜなら、直接差別するようなことを言っていないくても、だれかが差別になる発言をしているのに、見て見ぬふりをするということは、一緒になって差別しているようなものだとは私は思うからです。その時、ゲイブリエルのお父さん一人だけが「その言葉は使わないほうがいいですよ」と注意しました。デュークのお父さんは腹を立てたけど、私は、絶対に注意したゲイブリエルのお父さんが正しいと思いました。私もゲイブリエルのお父さんのように、正しくないと思うことがあったら、しっかり注意できる人になろうと思いました。その後も、黒人のフリータが人種差別的なことをデュークのお父さんに言われ、フリータはおびえていました。それを知った、フリータの家族とゲイブリエルの家族は、アメリカは白人だけでなく、「全ての人が自由を手に行っている国だ」とみんなに思いだしてもらうために、集会で話をすることにしました。この話があったことで、フリータとその家族も安心して自由に暮らすことができるようになったと思います。

今、世界ではたくさんの差別が起きていて、つらい思いをしている人がたくさんいます。人種差別や、障害をもっているからという理由での差別、性別や年齢で差別されたりということもあります。ちがいがあってあたり前、ちがいがあから楽しいし、面白い「みんなちがってみんないい」おたがいのちがいを認め合えれば、だれもがすごしやすい社会になるはずです。私はそんな社会にしたいし、そんな社会を生きたいです。

優秀賞

「いやし犬まるこ」を読んで

中央小学校 4年生 奥野 恵叶さん

ぼくは、半年前に犬をかいしました。その犬は沖縄で迷子になっていた犬で、保健所から保ご団体が助け出し、大阪に来ました。今、ぼくは、その犬と毎日楽しくすごしています。だから、保ご犬の本を選びました。

この本の主人公は「まるこ」という犬です。まるこは山梨県の犬捨て山で生まれました。そこには、四百頭以上の犬がいましたが、犬をお世話していたおじいさんがなくなっていました。そこで、地元の大学生たちが立ち上がり、そうじをしたり、えさを与えたりしましたが、きびしいじょうきょうでした。しかし、ある日救世主が現れました。マルコ・ブルーノさんというオーストリア人で、彼はすぐに犬の里親を見つける活動をし始めました。マルコさんは、まだ生まれて数カ月の白くかがやく犬を知り合いのドクトレーナーにあずけました。この白色の犬は、やがてマルコさんの名前をいただいて「まるこ」と名付けられました。まるこは、セラピードッグとして兵庫県の特別ようご老人ホームで働きくらすことになりました。まるこは、「ほえない、かまない、うならない」また、じっとすることも出来るので、セラピードッグに向いているとマルコさんは見ぬきました。まるこは、最初は人間におびえて、はしっこにいましたが、老人ホームのお年よりに少しずつなれていきました。

ぼくが、一番印象に残ったのは、車いすに乗ったお年よりやねたきりのお年よりが、まるこにおやつをあげたり、ふれあうことで、とてもよろこびます。これだけのことですが、「今日は楽しかった。明日も楽しく生きよう。」と言うのです。そして、おこりんぼうのおじいさんが、まるこにふれあって、はじめてえがおになり、しょく員のみんながおどろきました。犬は人の心を元気づけたり、いやすことができると思いました。ころされそうになっていた犬が、老人ホームのお年よりの支えになっていることに感動しました。

日本では、犬ねこが年間約一万四千匹、さつしよ分になっています。ぼくは、小さいころからじゅう医になりたいと思

っていたので、今、自分が何ができるかを考えた時に、ほご犬をかうと一匹でも命を助けることができると思い、ほご犬をえらびました。この本の中で、マルコさんは次のように言っています。「犬がいれば、ただいるだけで、あなたはいやされているのです。」

本当にその通りだとぼくは思いました。今、ぼくは、とても幸せです。なぜなら、犬が来たことで、家族にえがおがふえたからです。ぼくも、しょうらい、マルコさんのように、すぐに動物のために行動できる人になりたいと思いました。そして、今からもほご犬のことを周りに話して、みんなが犬をかう時に、ほご犬を選んでほしいと思います。

中学校

最優秀賞

「平和のバトンを読んで」

長南中学校 3年生 橋塚 雅さん

この本を読まないといけないと思いました。なぜなら、教科書の中だけだと思っていたことが、現実起きたからです。今年2月末にロシアとウクライナが戦争を始めました。ロシアは戦争とは認めていませんが、私は戦争だと思います。そして、そんな戦争の映像が毎日ニュースで流れてくる中、私たちは、沖縄に修学旅行へ行きました。ひめゆり平和祈念資料館や平和祈念公園そして、アブチラガマでガイドさんから沢山お話を聞きました。戦争は、何も残らないし意味がないものだと思えて強く思いました。沖縄で学んだことや感じたことを伝えていくことも大事ななと思っていた私にぴったりだと思いこの本を手にとりました。

この本は、「このままでは原爆のことが忘れられてしまう」と、勇気を振りしぼって話し始めた被爆体験証言者の記憶を、広島市立基町高校創造表現コースの生徒たちが、油絵に描いて記録するプロジェクトについて書かれています。証言者と密に接することで、平和な広島で今を生きる高校生たちが戦争や原爆を見つめなおしていく話がたくさん載っていました。

第一章「時が止まった8月6日」の主人公正則さんが、原爆を「太陽が落ちた」と表現していて、私はそれが、とても印象的でした。人類史上初めて、人間に対して使われた悪魔の兵器が生んだ火の玉は、1秒後には直径200メートルを超えるまでに達したため、多くの目撃者が、太陽が落ちたと思ったほどだったそうです。それによって広島市の約半数の人々が殺されてしまったのです。私が住む大阪に置き換えて想像すると、本当におそろしいことだと感じました。当時の夏休みが、8月10日からだったそうですが、私たちと同じように、小中高生たちが、夏休みを楽しみにしていたと思うと、いっそう今の私と重ねあわせることができました。今、勉強が嫌だなと思っている自分が、とても贅沢に感じました。

第2章「キャンパスに刻まれた記憶」では、1945年8月6日に何が広島で起こったのかは、その場にいた人々の記憶の中にしか残っていないと書かれていました。現代を生きる私には、少し驚きでした。今では、誰でも目の前で起こった出来事を携帯カメラで撮影し、世界に向けて発信することができますが、当時はまだテレビさえなかったのです。この章の主人公の当時中学1年生の光雄さんの体験が被爆についてとてもわかりやすく伝えてくれていました。学校で被爆した光雄さんは、柱などの下敷きになった同級生を助けながら、人影が見えたプールの方に助けを求めに行くと、そこは、地獄絵図だったそうです。プールの色は、泥と血で染まり、遺体がたくさん浮いていて、破裂した水道管から吹き出す水を求めてそこに人が群がり、争う人もいたそうです。光雄さんは、学校から自宅に帰ろうとすると、猛烈な吐き気に襲われます。放射線が全身をむしばみ始めていたのです。その後高熱にうなされ、なんとか生き延びた光雄さん

でさえ、60歳をすぎたあたりから、体中にガンができ、手術を何度も繰り返します。戦争が終わっても、被爆すると一生苦しめられるんだと、改めて原子爆弾の恐ろしさがわかりました。核兵器は怖いものだ何となく思っていたのですが、こういうことなんだと理解できました。物理的に戦争が終わっても、色々な面で傷跡が残ってしまうという事を、この章で私は学びました。

第三章「いのちの水と黒い雨」で、私は「黒い雨」に大変驚きました。原爆投下後、きのご雲の内と外で降ったと言われる雨は、土やちり、すすが大量に混じっていた為、どす黒く、ねばねばした雨だったそうです。この雨粒には原爆から放出された放射性物質も含まれていた為、これを直接浴びたり、雨水を飲んだりした人々の多くは、その後に原爆症に苦しむことになったと知り、ショックを受けました。あの時、水を欲しがっていた人達に追い打ちをかけるような残酷な雨に大変腹が立ちました。

この本には沢山の体験談が載っていましたが、体験のほとんどは、当時小中学生の頃の辛すぎる体験をずっと語ってきていなかった方々が七十歳や八十歳になり語ったものです。「このまま何も伝えないまま死ぬわけにはいけない」「核兵器の恐ろしさを次世代へバトンしないといけない」「決してアンカー最終走者にはしない」といった被爆者達の思いがこの本にはあふれていました。また、「人は強烈な話を聞いても、その時は感動し涙を流し怒りも覚えるが数日経てば、誰しも話の内容を忘れてしまうもの、自ら手と足を使って形にすることで心の中に残る」とありました。私もこの本に出会えたことでバトンを渡すお手伝いができればいいなと思いました。早く、この世から戦争をなくしたいと強く思いました。

優秀賞

「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」

長南中学校 2年生 戸野 咲菜さん

私たちのまわりには普通があふれています。「男性が女性を好きになるのが普通」「女性が男性を好きになるのが普通」「三十歳を過ぎたら結婚するのが普通」「結婚したら子どもを産むのが普通」「女性が家事をするのが普通」いくつか例を挙げましたが、皆さんにもこれら以外に思い当たる普通があると思います。

でも、実は男性を好きな男性がいて、結婚しない人もいて、女性が働き男性が家事をするという家庭もあります。そこに優劣はなく、みんなちがって当たり前のです。

しかし、今の日本では普通じゃないものを敬遠する空気が多くあります。私自身、まわりの人が当たり前にできることが苦手で、幼い頃から私にとって辛い言葉を多く投げつけられてきました。

また、SNSが日常化してから自分の普通とちがうものを攻撃して、自分が優位に立とうとする姿をよく見かけるようになりました。ツイッターでは毎日のように炎上事が起き、誰かが誰かを攻撃しています。自分の正しい、普通、当たり前を押しつけて、人を傷つける発言をしているのです。

「人を傷つけることをしてはいけない」皆さんも子どもの頃から何度もきいてきた言葉でしょう。しかし、これを全員が実践すれば仲良くなれるはずですよ。それがなかなか上手くいかない、これこそ事実です。

日本では、障がいの有無・LGBTQ・シングルマザー（シングルファザー）・貧困・太っているなど様々な差別があります。

その中で「レズビアンの人を差別してはいけないけど、太っている人は差別してもいい」というものではありません。どの差別がOKでどの差別をしてはいけないではなく、人を傷つけることはなんでも良くないということです。

さて、この本の主人公（十一歳）のテストで「エンパシーとはなにか」という問題が出ました。皆さんは答えられます

か。私は全く分かりませんでした。「エンパシー」とは、ただの同情や共感ではなく、相手の立場になりきって相手の考えや思いを想像して理解する能力のことです。イギリスのような多様な人種、言語、文化が集まる場所ではエンパシーは重要なものです。私の住む日本でも、外国にルーツのある人たちが増えてきているため、様々な文化的背景のある人と共存できる社会をつくるためにエンパシーを高める必要があるでしょう。

そして、この問題に対する主人公の回答が「誰かの靴を履いてみること」でした。誰かの靴を履いてみることは、英語で「他者の立場に立ってみること」という意味です。

私たちは学校で「いろいろな人がいることを理解しよう」「他者を尊重しよう」と教えられます。けれどそれは「日本人どうして」という前提付きになります。なぜなら、教室を見渡せば日本人しかいないからです。日本では、「ちがう考えをもつ人」の中に「ちがう人種」や「ちがう文化」は含まれていません。そんな日本で「多様性」を受け入れようと投げかけても、なかなか広まりません。道徳の授業でも、相手の立場に立って考えようとは教えられますが、この子はどんな気持ちだろう、もし自分がこの子だったらどうしていただろうという程度の話で終わります。相手の人種や文化、宗教、背景までも相手の立場に立って考えようという深い話ではありません。

日本でももう一步踏み込んで、誰かの靴を履いてみることを考えたほうがいいでしょう。

グローバルな社会と言われるこの時代だからこそ、その人の靴を履いてみる視点を持つ能力が重要になってきます。誰かの靴を履いてみることは、私たちの世代が身につけなければならない能力だと思います。

優秀賞

「ひめゆりの少女」

長南中学校 2年生 大野 璃子さん

来年、私は修学旅行で沖縄に行きます。中学校では毎年、六月二十三日の沖縄慰霊の日に沖縄戦の学習をしています。もっと知りたいと思ったし、来年の修学旅行に行く時に、いろいろと知っておくほうがいいかなと思ったので、「ひめゆりの少女」を読むことにしました。

筆者の宮城さんは、ひめゆり学徒隊として戦争に動員されました。私と歳のかわない宮城さんや女学生さんが看護活動をしていました。宮城さんが沖縄戦で体験したことが書かれていましたが、私の想像をはるかにこえる状況だったということを知りました。「手術を受ける患者の体を必死でおさえている生徒の耳に聞こえてくるのは、肉をはさみで切る音、そして患者の悲痛な叫び声。しかも麻酔剤がたりなくなったため、ほとんどが麻酔なし同然だった。」と書かれていました。こんなこと、私には無理だと思いました。他にも、負傷者の傷口にうじがわいていたとか切断した脚や腕を処理したり、死体を埋葬したりしたそうです。ひめゆり学徒隊の人たちがしていたことを知れば知るほど、こんなに大変なことをさせられていたのかと驚いたし、信じられませんでした。だけど、宮城さんや学徒隊の仲間は、恐怖心をおさえて看護を続け、弱音を吐かずに黙々と働いていたそうです。宮城さんたちはすごく強い人だと思いました。私には、そんな強さはありません。どんどん周りの人たちが死んでいく中で、すごくつらい看護のしごとをしなければならない……私にはできません。

宮城さんは、ひめゆり学徒隊に入りたくて入ったわけではありません。この本には「人間の生き方がただ一つに統制された時代」と書いてありました。今は、好きなことを好きな時にできます。でも、当時は、周りにすべてを決められていて、ひめゆり学徒隊の人たちは教師になるための勉強もできなくなったし、勉強できないだけではなく、命を落としてしまった人もたくさんいました。一度きりの人生なのに、楽しんだり好きなことをしたりできないのは悲しいです。何よりも、一人ひとりの人権が大事にされていないと思います。

自分がこの時代に生まれていたら、ひめゆり学徒隊として戦争に動員されていたら、と考えると生きていけません。こんなひどい状況の中にいると、死んでしまいたくなと思います。だけど、宮城さんは生き続けました。強い人なのだ

ろうと思いますが、生き続けられたのはそれだけではなくて、お父さんの言葉が残っていたからではないでしょうか。お父さんは、宮城さんが戦争に動員されると決まった時に、「十六歳で死なせるために育てたんじゃない。」と宮城さんに言いました。私は、沖縄戦の学習をしたときに教えてもらった、沖縄で大切にされている「命どう宝」という言葉を思い出しました。宮城さんも、宮城さんのお父さんも、「命どう宝」という言葉を大事にしていたらうし、宮城さんは待っている家族がいたから生き続けられたのかもしれませんが。私も、家族や友だち、身近な人の存在があれば、「生きよう」と思えるかもしれない、と感じました。

今、おいしいものを食べたり、学校に通えたり、そんな生活ができていることは幸せなことなんだ、とこの本を読んで改めて思いました。戦争が起こると、人が人を殺したり、自分の命を自分でたったり……戦争は、人を人でなくしてしまいます。戦争が起こると、すべての人の人権がなくなってしまいます。だから、私は、戦争のない世界になってほしいし、そんな世界にしたいです。そのためには、戦争を他人事だと思わないことがとても大事だと思います。私は、これからも戦争のことを学んで知っていききたいし、来年の修学旅行では、沖縄の人の思いを実際にきいて、自分の考えを深めたいと思います。そして、自分の学んだこと、考えたことを発信して、たくさんの人と一緒に戦争のない平和な世界をつくらしていきたいです。

私は、もともと人前で自分の意見を言ったり発表したりするのがにがてです。でも、人権問題研究部で活動しているうちに、自分から進んで行動することが大切だと思うようになりました。一月に行われる「せんなんユース人権フォーラム」では、自分が学習してきたことや考えたことを発表しようと思っています。それが、平和な世界をつくるために、私にできることだからです。
